



第9回 論語指導士 土筆亭曲全

マクニールの「疫病と世界史」などを読むと、人類の歴史は、疫病との戦いであったこともよく分かる。仮令、モンゴルの大遠征がヨーロッパでペストの流行をもたらした、大航海時代がアメリカ新大陸で先住民の人口激減をもたらした。歴史的に見ても、グローバル化は病理学的に疫病の流行をもたらさう。今回のコロナ禍も、高度にグローバル化された現代社会にとっては、いずれ不可避なものであったものかもしれない。

改めて論語に立ち返った際に、この危急存亡の秋(とき)への警句として、どうしても触れたい言葉がある。顔淵編の「民、信ずるなくんば立たず。」という名言である。孔子は、兵と食と信という国家存立に必要な重要な3つのものに、順番を付けた。兵が最劣後なのは、そうであろうが、食と信とを比べた際に何の迷いもなく孔子は信を選んだ。孔子がこのコロナ禍の中に生きていたとすれば、何を最も重視するであろうか？

先日、久しぶりに電車に乗った。驚くことに、乗客は隣席を避けて座り、全員がマスクをし、電車の音だけがこだまする静寂があった。乗客は、このパンデミックに打ち勝つために何が必要か理解している。そこには、長年の日本の歴史で培われた和があり、孔子の篤く説いた信が確実に存在した。世界でこのような奥妙な電車風景があるのだろうか？年寒くして、然る後に、松柏の後に彫むを知る。日本人は、もっと自分達の力を信じて良いのではないか。この危殆は、いずれ去る。今、我々が試されているのは、未来への強い信頼である。

「加地伸行からの百字答礼」

土筆亭曲全殿へ。

疫病は全世界的なものです。中国は明代のころ（NHKの時代劇「麒麟がくる」のころ）の疫病の状態を月刊誌『Hanada』7月号の拙稿に記しましたので御覧ください。未来への信頼は、全世界人類の希望ですよね。